若越郷土研究
1974

越前藩と勝海舟

―緊迫した内外情勢への対決をめぐって―

三上一夫

一、はじめに

幕末の内憂外患の危機的な情勢のなかにあって、越前藩が幕閣や会津・桑名など佐幕派と、薩・長など西南雄藩の倒幕派との間に介入して、国論を統一し「公議」による統一国家のビジョンを真剣に追求したが、このような越前藩論をよく理解し共鳴した人物として、幕府側の要人のなかでは、まず勝海舟を筆頭にあげなければならない。このことはいっぽうにおいて、海舟の開明的な論策に対して越前藩論が少なからざる影響を与えたものとする問題の立て方や問題意識が成り立つことになる。

そこで越前藩論と勝海舟の論策の相互関連的な側面に視点をすえながら、この両者が緊迫した内外の政治社会情勢に、いかに真剣に対決し、いかに収拾しようとしたかについて、いささか検討してみたい。

二、春嶽＝小楠政権と海舟

海舟と越前藩との出会いがどうかというと、熊本藩出身で越前藩に招かれて同藩の改革派コースを主導して活躍した横井小楠が、重要な仲立ちとなったことに注目したい。

海舟が最初に小楠に会ったのは、海舟の晩年の談話などを収録した『清譚と逸話』によると、彼の長崎海軍伝習所時代ということになるので、安政年間にさかのぼるものと考えられる。つまり海舟は「横井小楠の事は尾張の或る人から聞いて居たが、長崎で始めて会った時から途方もない聰明な人だと心中大いに敬服して、しばしば人をもってその説を聞かした」と述べている。またその逸話のなかで、小楠と西郷隆盛とを比較しながら「横井は自分で仕事をする人ではないけれど、もし横井の言を用いる人が世にあったら、それこそ由々しい大事だと思ったのさ、その後、西郷と面会したら、その意見や議論は、おれの方がまさるほどだったけれども、いわゆる天下の大事を負担するものは、はたして西郷ではあるまいかと、またひそかに恐れたよ、（中略）横井の思想を、西郷の手で行なわれたらもはやそれまでだと心配していたのに、はたして西郷は出てきたわい」と言い、小楠の思想を極めて高く評価している。

ところで海舟と小楠が、お互いに深いじっ懇の仲になるのは、文久二年（一八六二）の後半期になってからである。当時幕府の思い切った改革人事のなかで、海舟は同年七月に軍艦操練所頭取となり、ついで閏八月、軍艦奉行並に命ぜられた。

いっぽう七月九日松平春嶽が政事総裁職となり、将軍後見職となった一橋慶喜とともに、抜本的な幕政改革に乗り出したのである。そのさい春嶽の唯一の謀臣が小楠で

あった。こうして小楠を介して、さらに春嶽と海舟とは、それぞれの論策の上でも、お互いに共通理解を持つようになったといえよう。

同年の閏八月一九日、春嶽と海舟が会談した。そのとき春嶽は海舟に、海軍の増強策についての意見を求めたのである。すると海舟は、「唯、幕府の士のみを以て、これに応ぜしめんと欲せば（中略）盛大得べからず」①〔引用文中の傍点は筆者による。以下同じ〕と述べ、幕臣かどうかにとらわれずに、また貴賤をとわずに有能な人材をどしどし用いなければならないと強調した。

国土防衛のため海軍力を思い切って増強せよというのは、小楠のかねてからの持論である。「当今航海大に開け海外の諸国をも引受ずして適はざる時勢と成りては、日本孤島の防守に海軍に過たる強兵はなし」②との小楠の主張は、春嶽によって受容され、文久期幕政改革の重要な一環に組み込まれることになるが、このさい海舟の意見も大きくクローズアップされる。

当時幕閣のなかの有力な考え方は、「海軍の大権、政府（註、幕府）にて維持し」て、しかも諸藩を度外視し「幕府の士」だけで海軍力を増強しようとするものであった。これに対して海舟は真向から反対するのであるが③、小楠の考え方も期せずして海舟と全く一致する。

小楠が同年八月二七日幕府の大目付岡部長常に、「越前一藩の定議」として説いた所論に着目すればよい。

つまり岡部の「海軍はなかなか失費継ぎがたく候」とする意見に対して、小楠は「是は幕府御一手にて相適ひ申すべき様にもこれなく、諸侯と合体にて興さるべき義、当時海軍にあらずしては、絶海孤島の日本国、歩兵を以て擁護出来申すべき訳はこれなく、士人も船に乗り候へば心細く、覚悟を極めずしては相成らざる事故、自ら士心を振ひ、外国に往来して見分（聞）を広め候はば、強兵是より先きなるはこれなく候④」と答えている。

この点、幕府単独の力では到底強大な海軍力を創成することは困難であり、四周海にめぐらされた日本国として、幕府と藩との障壁を取り除き、「諸侯と合体」による挙国態勢の下でなければ、「外圧」に堂々対抗できるだけの海軍力は期待できないというのである。

このように、海軍増強策について、小楠―越前藩論と海舟の意見とは全く合致するものであり、春嶽＝小楠政権の強兵策に対して、海舟が幕府側での最もよき理解者であり、また協力者であった。

さらに幕政改革の政治路線についても同様で、端的にいえば、従来の幕府の「私」に対して「公」の政治を立てようとする春嶽＝小楠政権の論策に海舟は心から共鳴するのである。

春嶽が政事総裁職の就任前後に起草したといわれる「虎豹変革備考」のなかで、「公武御一和の事」はじめ六項目を挙げ、その三番目の「幕私を芟去の事」では、△「昔より幕府の政度、親藩を重んじ、外藩を疎んずる宿弊、今に至って甚し」いため、「天下の公論」に対しては親藩、外藩の別なく参画させること、△「世に有名の諸侯」を挙用して「公共の論」を議させるこ

と、△「幕下の臣」も「諸侯の臣」も同等で区別しないこと、△老中職の資格についての制限を撤廃し、「有名賢明の諸侯」を撰任すること、などを強調している。⑤

このような論拠に基づいて、同年八月二二日参勤交代制―幕府中心主義による最も明確な「私政」の具体的な表われであるが―の大幅緩和に踏み切ったのである。⑥その点かねがね幕府の「私政」に批判的な海舟の政治路線とも符合することはいうまでもない。

ところが、かかる改革政治に対して、幕閣の主流は必ずしも賛同するわけではなく、むしろ反対的な態度を固執した。

同年九月の軍制掛の「海軍御建興之義に付申上候書付」⑦の上申書では、参勤交代制の緩和により、大名が在国し「武を振ひ富強の術計厚く相心掛け」ることは、かえって大名の「隠然割拠の形勢」を増すことになると危惧する。そのため「海軍之大権御一手に御統轄相成居候へば、如何成強梁跋扈之大藩これ有り候とも、是を討滅致し候事難からず」との意見をひれきするのである。これはまさしく、春嶽＝小楠政権や越前藩論が目指す幕府の「諸侯と合体」による海軍力の強化を問題とするのではなく、幕府単独の軍事力をいかにして増強するかという点に論拠を置くものといえよう。つまり諸藩に海軍を分担させると反乱のおそれがあるため、あくまで完全な「徳川海軍」、「幕府中心の海軍」を編成・強化すべきだとする考え方が、幕閣内部では意外に強かったのである。

いっぽう海舟が、同年一一月一九日小楠と会談したさい、小楠は「今や急務とすべきは興国の業を以て先とするにあり、区々として開鎖の文字に泥むべからず。興国の業、侯伯一致、海軍盛大に及ばざれば能わず。今や一人も爰に着眼する者なし。又歎ずべしと。⑧」と、嘆いているが、海舟こそこの点の最もよき理解者であることを認めての発言にほかならない。事実海舟が翌文久三年に、後述する神戸海軍操練所の具体化に乗り出すことからも明らかである。

そこで、「唯非を悔ひ過を改め、私見を去って公道に随ひ、天下と大同の政を御軌行ひより外はこれ有り間敷と存ぜられ候」⑨と、幕閣に対して訴える春嶽ではあったが、ついに幕藩による海軍力増強の構想を断念せざるを得なくなる。それとともに幕政改革全般をめぐり「老中も若年寄も概ね姑息偸安にして、改革の誠意なく、〝いづれとも橋（註、慶喜）・越（註、春嶽）二公の御英断にあるべし〟といひて、事毎に責任を避ける」⑩ような嘆かわしい情勢の下で、文久三年三月春嶽＝小楠政権は退場する結果となったのである。⑪

註

① 「海舟日記」（『勝海舟全集』所収）文久二年八月二十日の条

② 「国是三論」山崎正董編『横井小楠遺稿』四一頁）

③ 文久二年八月二十日の御前会議で、御軍制の改正局で議せられた国土防衛計画について、海舟に対して「我邦にて軍艦三百数十挺を備え、幕府の士を以てこれに従事せしめ、海軍の大権、政府にて維持し、東西北南海に

軍隊を置かんには今よりして幾年を経ば全備せんや」（「海舟日記」）と質問したところ、海舟は、「これ五百年の後ならでは、その全備を見るに到る難かるべし」と答えるなど、幕府単独の海軍増強策に真向から反対している。

④『再夢紀事』（全）（日本史籍協会刊）二七〇頁

⑤『松平春嶽全集』（二）（三秀舎刊）九二―一〇〇頁

「虎豹変革備考」の草案の起草年月日は不明であるが、春嶽の政事総裁職就任前役とみられる。

⑥ 拙稿「文久期における越前藩の幕政改革運動について」（『日本歴史』（吉川弘文館刊）二八八号、昭47・5、所収）において、参勤交代制の大幅緩和を中心とする一連の改革政治内容について検討した。

⑦「海軍歴史」（『勝海舟全集』所収）

⑧「海舟日記」文久二年十一月十九日の条

⑨『続再夢紀事』（一）九頁

⑩『徳川慶喜公伝』（二）（龍門社刊）九五頁

⑪ 文久三年三月九日春嶽は政事総裁職の辞表を提出、その後十八日には家老本多飛騨・岡部豊後を二条城に遣わし慶喜に対して重ねて辞職聴容を請うた（注、その内容は『諸名家書翰綴』（松平文庫）に収録）が認められず、二一日無断で離京し二五日帰藩したのである。

三、坂本龍馬と越前藩論

文久三年（一八六三）五月一六日、海舟の命で門弟の坂本龍馬が福井を訪れて春嶽に会ったが、これは海舟による神戸海軍操練所建設①に関連して資金を援助してもらうためであった。その申し入れに対して、同藩では五千両を融資したといわれるが、海舟の海軍力増強の構想に、越前藩がいかに大きな期待を寄せたかがわかる。

前述のとおり、文久期幕政改革において春嶽が画策した海軍力増強計画が、幕閣の満足な支持を得られずに行き悩んだだけに、このさい海舟の「一大共有之海局」（「海軍歴史」）をめざす海軍操練所を原動力として、「諸侯と合体」による幕・藩を打って一丸とする全国的な海軍力の増強を真剣に待望したとみてよい。

さらに龍馬は福井来訪を機会に小楠にも会って、一諸に三岡八郎（由利公正）宅を訪れている。当時は京都を中心に長州勢の尊重攘夷運動や天誅のあらしが吹きまくり、国内の分裂的な政治情勢が際立っていた。

このさい越前藩では、春嶽を先頭に押し立て藩兵約四千の強大な軍事力をもって上洛し、京都で朝幕の要人はじめ攘夷派をも含めた全当事者の会同によって内外の重要課題を解決しようとする、いわゆる「挙藩上洛計画」②を進めている最中であった。この計画の立役者は小楠で、彼は藩内改革派を主導して、挙藩的な上洛態勢を真剣に画策したのである。

三岡宅での三人の会談の内容は明らかでないが③、当然小楠や三岡は、藩論沸騰の事情や計画の具体内容を龍馬に打ち明けたに違いない。これに対して龍馬は、いろいろと意見を述べ、大いに激励したことも推測される。

この会談の結果、当時の険悪な内外情勢の下での国論分裂を、できれば「日本国中

共和一致の政事」を目指す越前藩の力で取りまとめ、何とか政局の収拾をはかって欲しいとの真剣な気持が龍馬の胸に秘められたとみてよい。

こうした龍馬の考え方は、その後彼が六月二九日と翌三〇日京都の越前藩邸を訪れたさいの村田氏等との対談の内容からはっきりうかがわれる。④結論としては、「天下の公論」により対外問題を処理し、もし外国との戦争ともなれば、挙国一致の覚悟で立ち向かわなければならないとのことであった。

越前藩では、すでに五月二六日に挙藩上洛が藩議として決定ずみである。挙藩上洛のうえ、同藩が主導して朝廷・将軍・大名・公家・幕府や諸藩の要人らの協力一致するための大会議を開き国論の統一をはかろうとするからには、龍馬もこの越前藩論に対しては、たしかに深い共鳴を覚えたに相違ない。

しかしこの計画は実施の寸前で中止のやむなきに至ったが、⑤その後暫らくして起こった「八月十八日の政変」は、明らかに薩摩・会津両藩の公武合体路線によって尊攘派の排撃を課題とする軍事クーデターとみなされる。したがってこれを越前藩の企図するところと同日に談ずることはできないであろう。

つまり越前藩の場合は、小楠が明確に指摘したとおり、⑥「大議論御立て、暴論御取静めに相成る覚悟」とは、はじめからクーデターによって「暴論家」の尊攘派を排除するのではなく、「暴論家」をふくんだ討議の場をつくり、暴論を取り鎮め、道理にしたがって結論を導こうとするものである。また対外問題についても、「英道理に因て鎖とも開とも和とも戦とも御決議被成候へば、彼是共に安心の地に至り可申候」というように、評議の過程を重視するわけで、あくまで一派に偏しない「公議」によって、国論を定めるのである。

しかも挙藩上洛運動に当たり、公武合体派諸藩の同調を期待し、薩摩・肥後・加賀・尾張・会津などの「列藩」に真剣な政治工作を試みたが、これとて諸雄藩の協力態勢の樹立により「天下公共の国是を立てる」方策を目論むものであり、そこにはかねがね同藩の改革派コースが真剣に志向する雄藩連合の統一国家の政治構想が託されているものとみなければならない。⑦

その点、海舟は「八月十八日の政変」について、「聞く。京都にて、薩主として、会津、上杉所司代憤発し、国事掛りの公卿を廃止し、長藩を追うと云う。あゝ、一雄倒れば一雄起る、真に乱世の姿勢、朝威、幕威、共に地に落つ」(文久三年八月二三日「海舟日記」)と厳しく批判する。⑧つまりこうした軍事クーデターの方式による政局の転換では、海舟が越前藩に期待した「公武真の御一和のため有志の大諸侯と邦家の大事について決議」するようなことは、到底覚束ないことを明らかに示唆するわけである。

要するに越前藩の挙藩上洛計画をめぐり、基本的な政治路線の上で、海舟やその門弟の龍馬の意向と越前藩論とが奇しくも一致するのは、はなはだ興味ぶかいところ

である。

註

① 文久三年四月、海舟が将軍家茂の大坂湾視察に従い、神戸海軍操練所建設の許可を受け、翌元治元年五月開設す。

② 具体内容は、拙稿「越前藩の挙藩上洛計画について」（『若越郷土研究』一七―一、昭47・1所収）を参照。

③ 三人の会談につき、『子爵由利公正伝』のなかで、三岡の後年の追想談をかかげるが、三岡宅で炉をかかえて痛飲し、坂本は愉快極まって、「君が為め捨つる命は惜しまねど心にかかる国の行末」と、自作の歌をひろうしたというような叙述にとどまっている。

④ 『続再夢紀事』㈤六二―五頁、なお龍馬はこのさい、海舟の依頼で、さきの越前藩による資金融通の謝意をこめて、騎兵銃一挺を同藩に贈っている。

⑤ 上洛計画が文久三年五月二六日藩議として決定しながら、その後幕府からの藩主の参府要請など諸情勢の変転により、七月二三日に至り、藩主の参府を決め、それとともに上洛計画はとりやめ沙汰となったのである。

⑥ 前掲『横井小楠遺稿』四一六―七頁

⑦ 越前藩の志向する雄藩連合の統一国家論の政治的側面については、拙稿「越前藩における統一国家論の展開」（『若越郷土研究』一八―一、昭48・1所収）で、またその経済的側面については、「幕末における重商主義的論策について―福井藩を中心に―」（『若越郷土研究』一三―五、昭43・11所収）で検考した。

⑧ 薩摩藩では「八月十八日の政変」役の「明賢諸侯」による参預会議に期待したが、なんら当面の課題の結着がつけられず会議はざ折してしまった。こうした政変後の芳しくない行方について、海舟はすでに予測していたとみてよい。

四、露艦対馬占領事件

文久元年（一八六一）二月から八月にかけて、ロシア艦ポサドニック号（艦長ビリレフ）が、対馬に借地を要求して強引に停泊した事件がおきた。この島は九州と朝鮮半島との中間にあって交通・貿易や戦略上の要衝であるだけに、イギリス・フランス・アメリカ・ロシアのヨーロッパ列強はいずれも着目していたが、ロシアが先手をうって敢然と二月浅茅湾尾崎浦に入り、船体修理を口実に測量し、さらに芋崎浦に投錨し兵舎を建設して周辺の借地を要求したのである。

ついで大船越村へのロシア兵の上陸に対しては、島民は実力で阻止して殺害にも屈せず抵抗しつづけた。また藩主宗義和も借地交渉を拒否するという強硬態度をとった。いっぽうロシアの南下政策に脅威を感じたイギリスは、ロシアに厳しく抗議し、イギリス東洋艦隊司令官ホープが軍艦二隻を率いて対馬に赴いて、ビリレフ艦長に退去を要求した結果、ロシア艦は八月ついに要求に応じたのである。

もともと「海舟日記」は、翌二年八月一七日より始まるが、早くも四日目の二〇日付には、その前日の会談のなかで、対外政策面で対馬問題を真っ先に取り上げているのに注目したい。

つまり海舟が春嶽と老中水野忠精と会談したさい、次の通り語った。

我対馬島は英仏懇望するの意あり。これは、魯国の西陲を押止するの大策なり。急

にこの島を以て上地仰せつけられ、良港を開き、貿易地となす時は、朝鮮、支那の往来開け、且、海軍盛大に到るの端ならんか、云々。

対馬の戦略的および貿易上の重要性から、これを幕府が直轄領とすることを海舟が勧めたのである。このような彼の発言からみて、おそらく春嶽が対馬問題について海舟の意見をただしたものと考えられる。

そこではなはだ興味ぶかいのは、かねがね越前藩が露艦対馬占領事件についていろいろの詳しい情報を収集していることである。『松平春嶽公史料』①のなかで、この事件に関連した数多くの情報や密書の写しなどが含まれているのには全く驚くほかはない。特に『同史料』第一四冊の対馬・壱岐についての情報として、文久元年二月一九日宗対馬守より久世大和守（老中久世広周）に差し出した調書をはじめ、ロシア艦の動静や宗氏、島民それに幕府の対応策等について計二三件におよぶ史料を伝えている。②

この点、すでにペリー艦隊の来航前後から「外圧」に対する危機意識に徹して海防策に真剣に取り組んだ同藩としては、決して「対岸の火事」として看過することはできなかったのである。

いっぽう海舟のその後の日記は、対馬問題についてもしばしば触れている。しかもそれに関連して文久三年（一八六三）四月から五月にかけて朝鮮についての論議が、幕閣内で活発化するのである。

当時国内では尊皇攘夷運動が盛んで、対外的にも開・鎖論が沸騰し、幕閣で「征韓論」まで論議される緊迫した情勢のなかで、海舟に「鮮行の命」が二度も下っている。それは同年六月五日と翌元治元年三月三日で、いずれも「朝鮮国の事情を探索せよ」ということであった。

しかし「海舟日記」の慶応元年（一八六五）四月二一日の条では「対州を介して朝鮮の交際を厚くし、又朝鮮に商を通じ、続きて北京に通ぜむとす。此策、吾三、四ヶ年以前に建議、昨、既に鮮行の命ありしに閣老変じて終に其の事ならず」と述べ、「鮮行の命」が「閣老変じて」実現しなかったとしている。

ところでこの文面でも明らかなように、海舟にとっては、「鮮行」は決して侵略的な「征韓」を目指すものではなく、③むしろ日本と朝鮮との和親・同盟関係を画策したのである。

当時の朝鮮の問題点としては、ロシア・イギリス・フランスのいずれもが、アジア経略の重要拠点として確保しようとしたことで、日本がそれを傍観することは断じて許されないと、海舟は判断したものといえよう。

したがって、さきの露艦対馬占領事件に対する海舟の基本的な考え方としては、対馬の危機は日本や朝鮮の危機であり、ひいてはアジア全域におよぶという深刻な対外的危機感に根ざしたものであった。

そこで勝舟は、まず朝鮮に働きかけ、さらに中国の協力を求め、東アジアの軍事的同盟を成立させ、ヨーロッパ列強の厳しい「外圧」に断固対抗できる戦略的防衛態勢の構想を描いたのである。④

ところで、越前藩ではすでに安政期藩政および幕政改革運動の段階で、春嶽の謀臣として活躍した橋本左内が、対外政策のなかでアジア諸国を打って一丸とする軍事同盟を真剣に画策したことに注目したい。⑤

当時の緊迫したアジア情勢のなかで左内は、幕府の「只管和親平穏」を望む日和見主義を鋭く批判し、「公辺に於ては和親の外貌に拘らず益々戦闘必死の御覚悟」（安政四年九月六日、慶永外四公の建白書原案）で富国強兵の実をあげ、「近傍の小邦を兼併し、互市の道繁盛に相成り候はば、反って欧羅巴諸国に超越する功業も相立、帝国の尊号終に久遠に輝く」（安政四年一一月二六日、慶永意見書）ものと判断する。つまりヨーロッパ列強に対する防衛線を、日本全土だけではなく、朝鮮・満州・中国・インドなどアジア全域に拡大することを主張したのである。左内が用いる「併合」とか「掠略」という言葉も、実はアジア全体の協力態勢を作り上げるためのものであった。⑥

したがってアジア外交の基本的路線の上で海舟と、左内が主導する越前藩論とは奇しくも一致することがわかる。このことからも、露艦対馬占領事件についての両者の危機意識に徹した情勢判断がほぼ合致したものとみなければならない。

註

① 小池藤五郎編『政事総裁職松平春嶽、幕末覚書』所収

② 露艦対馬占領事件のおきた当時、春嶽は江戸霊岸島邸に幽居中で、横井小楠が春嶽の招きにより、文久元年四月より八月まで霊岸島邸にて春嶽に講学している。そのさい、対馬問題についても、収集した情報に基づいて種々検討したもようである。

③ 「海舟日記」にも、文久三年四月から明治二年にかけて、「征韓の議」の語がしばしばみられるが、これは明治六年の侵略的な征韓論とは異なり、朝鮮を日本と同じくヨーロッパ列強の「外圧」を受けつつあるアジアの一員としての連帯意識においてとらえていることに注目したい。

④ 文久三年四月二七日、桂小五郎と対馬藩の大島友之允が来宅し朝鮮問題を論じたときに、海舟は「当今アジア洲中ヨーロッパ人に抵抗する者なし。これ皆規模狭小、彼が遠大の策に及ばざるが故なり。今、我邦より船艦を出だし、弘くアジア各国の主に説き、横縦連合、共に海軍を盛大し、有無を通じ、学術を研究せずんば、彼が蹂躙を遁がるべからず。先ず最初、隣国朝鮮よりこれを説き、後、支那に及ばんとすと。」と述べて、桂・大島の両人をすっかり同意させている。

⑤ 拙稿「橋本左内の外交観について」（『社会文化史学』〔社会文化史学会編〕第3号所収、昭42）において、左内がアメリカの支援とロシアとの攻守同盟により、日本を中心としたアジア全体の防衛態勢を確立しようとする論策を構想した点について検考した。

⑥ 左内は、安政四年一一月二八日付けの村田氏寿あての書翰のなかで、「（日本が）独立に致候には、山丹・満洲之辺・朝鮮国を併せ、且亜墨利加洲或は印度地内に領を持せずしては、迚も望之如ならず候」と述べている。これは、真木和泉や平野国臣などの尊攘派志士の排外的な大陸侵略論とは異なり、東アジア同盟的な外交路線を画策したものとみなければならない。

なお山口宗之『幕末政治思想史研究』において、幕末に勝を中心に論議された征韓論につき、「露艦の対馬来航に刺激された外圧の危機意識から日・鮮・清連合してこれに対抗するといく東亜連帯意識・近代的外交思想の芽生えがみられたが、……（以下略）」（二〇二ページ）としているが、幕末の征韓論の特質を明快に規定したものとみたい。

五、第二次長州征伐への厳しい目

幕末史で内憂外患のピーク化したのが、慶応二年（一八六六）の第二次長州征伐であった。このさい越前藩では、幕府からの出兵要請を断り、しかも再征反対の真剣な建言や諫止を行った。これは一体如何なる事情によるものであろうか。

実は元治元年（一八六四）の幕府の第一次長州征討では、越前藩として藩主松平茂昭自らが副総督となり、大軍を率いてはるばる九州の小倉表まで出陣したのである。つまり同年八月二八日福井を出発、翌慶応元年三月七日帰藩するまで、前後約八カ月の長期にわたって軍役を負担した。①

そのため藩では莫大な軍費をついやし、これが財政面で大きな痛手となったことはいうまでもない。しかもいたく辛酸をなめたのは、単に従軍した将兵ばかりでなく、糧食を徴発されたり種々の軍役を強いられた一般領民でもあった。とくに農民に課せられた負担が意外に大きかったのである。②

たとえば近年大野市土打の松原勇氏宅で発見された「長州征伐ニ付夫人足覚帳」③によれば、元治元年一〇月二三日大野郡下で田野・富島・新田など六カ村の越前藩領の従軍人夫の割当がなされている。そのなかの「くじ当り目録」には一番の権六郎から八〇番の孫吉まで八〇人の名列があっている。

また人夫役のいろいろの条件や賃金など七カ条を記載した「夫人足極方の事」には、△従軍期間は六〇日を基準とする。△もし病気などで支障のある場合は、村役人がよく調べたうえ間違いないと認めれば、次のくじ番のものに差し送る、△差し支えができてやむを得なければ、村役人にうかがい出て、「名代」（代理）を出してよい、△従軍して特に家が困る場合は、村役人がよく調べたうえ、世話を求めることができる、などの条件がみられる。賃金は一人一日分銀三匁となっているが、これを当時の肥後米石当り三二五匁（同年一〇月）の相場によって換算すると、米一升分ほどに当たる。

当時の日雇賃金の銀三～四匁に比べると、決してよい賃金とはいえない。しかも年齢的にも青・壮年どころが人夫に徴用されるため、農家にとっては相当な負担だといわなければならない。いっぽう藩側でも、従軍人夫の賃金の支払いに加え、家族のことまで面倒をみなければならず、これまた大きな重荷になったことはいうまでもない。

こうした事情は、出陣した諸藩にはいずれも共通するところで、兵員の動員数では特に西国の諸藩が大きな負担を背負ったのである。

そのため越前藩では、第二次征長に対して厳しく批判し、慶応元年四月三〇日藩主

茂昭の名をもって、建白書を幕府に提出した。そのなかで、第一次征長は戦火には及ばず幸せであったが、「又々大兵を被動候儀は必天下ノ乱階ニテ諸大名ノ困窮、萬民ノ怨嗟誠ニ以不一方事共ニテ、此上如何成不測ノ変を可生哉も難計、乍恐御家ノ御為ニも、相成間敷歟と不堪恐懼奉存候」と強調するのに注目したい。

しかし同藩の真剣な諫止にもかかわらず、幕府は再征の準備に努め、九月二一日朝廷に奏請して長州再征の勅許を得た。ところで翌慶応二年の政情激動の年を迎えたのであるが、一月のいわゆる「薩長同盟」の成立により、長州藩側では挙藩的な反幕勢力を結集することになる。

ところで海舟は、幕府側で長州再征に極めて批判的な要人の一人として、春嶽に対しても、武力によらない政局の収拾について懸命に論じている。

春嶽は、同年四月二八日の海舟からの書翰に対する返書のなかで、「全く御用途御不足より御取箇御増高禄御減或ハ御借米等云々ノ由、恐レ乍ラ風聞トハ申シ乍ラ苛政ノ御施術ニ相成リ候テハ、実ニ危殆ノ事ト杞人ノ憂ニ堪ヘズ候」と、封建支配者側の旧態然たる収奪政策にいたく憂慮し、さらに同年五月上旬の畿内を中心とする米騒動などの一揆についても格別の関心を示して、「下民一時ノ蜂起モ計リ難ク人心ノ離散必発、御同意申スベク憂ニ堪ヘズ候事ニ候」と、海舟の情勢判断④に全く同意するのである。

たしかに同年五月に入ると、一揆による不穏な情勢が急速に高まり、まず摂津西宮に端を発し、ついで兵庫・灘さらには池田・伊丹へと広がり、一三日には将軍が在城する大坂とその近郊に波及し、ついに「大坂十里四方は一揆おこらざる所なし」という有様となった。

いっぽう対外関係として、イギリスが薩摩・長州を、フランスが幕府側を援助すること自体が、先進資本主義列強による内政干渉の危険性を増大させ、これこそ最も恐るべき「外圧」とみなされるわけである。

海舟が、（払郎西（フランス）は餓狼なり、英は饑虎なり」（慶応二年仲秋・淀閣老あて書翰）と英・仏を警戒し、また春嶽が、「宇内ノ形勢土崩瓦解ト一変仕候ハハ外国の侮慢を来たし、如何成不測ノ巨患可相発も難計、皇国ノ盛衰・安急存亡ノ境ニも可有之哉」（慶応元年五月二日・山科宮あて書翰）と訴えるような手厳しい情勢判断こそ、両人の危機意識に徹した考え方が、いみじくも一致するのを率直に認めざるを得ない。

しかし幕府は、こうした強い反対意見を押し切って長州再征を敢行した。領民の力を結み入れて挙藩的な反撃態勢を固めた長州軍の前に、幕軍はほとんど連戦連敗という情けない結果に終ったのは周知の通りである。

註

① 第一次征長における越前藩の出兵については、松平文庫（福井県立図書館蔵）の『征長出陣記』・『長防征伐畧記』・『長州征伐小倉陣中日記』などが詳述する。

② 福井出発の前日八月二七日に「御家中下地御借米ノ倍懸リ被仰付候、此上一統厚加勘弁

治世ノ費用相省キ被続相勤候様被仰出候」（『征長出陣記』）との達書を出すなど、軍費ねん出のためには家臣団一同に「借米」まで要請しなければならなかったのである。

③ 松原家は、越前藩領の土打村はじめ近辺の田野・富島・新田など六カ村をおさめる大庄屋で、「長州征伐ニ付夫人足覚帳」の記録は、土打村庄屋重兵衛より藩庁に差し出した控え簿とみてよい。

④ 慶応二年四月二八日春嶽あて勝海舟書翰（五月一一日福井到着）（『続再夢紀事』㈤）では、「唯カクノ如クニテ御永引相成リ候ハバ、下民一時ノ蜂起モ計リ難ク人心ノ離散ハ日ニ相見エ、是ハ尤モ恐ルベシ」と、海舟は民衆蜂起が封建支配者側にとり最も危惧すべき事態を招くものと訴えている。

六、海舟と西郷とをとりもつ越前藩

慶応三年（一八六七）一二月の「王政復古」の大号令後、年明けて間もなく、海舟や春嶽が最も恐れた「国内分裂」の戊辰戦争が始まった。① そのさい政府軍が予定した三月一五日の江戸城総攻撃を前にして、海舟が一三日には高輪の、翌一四日には、田町の薩摩屋敷で、政府軍参謀の西郷隆盛と劇的な会見をしたのはあまりにも有名である。

この事柄については、種々の俗説もみられるが、要するに海舟と西郷の肝胆相照す人間的な触れ合いに、最も深い興味がそそられる。もし海舟が西郷以外のものと、または西郷が海舟以外のものと交渉したのでは、おそらくあのような鮮やかな結着はつかなかったものと考えられる。

ところが海舟と西郷とを引き合わせて、最初の人間関係を取り持ったのが越前藩であることは余り知られていない。元治元年九月一一日、両人がはじめて大坂で対談したが、その仲立ちをしたのが、越前藩士の青山小三郎であった。

当時の越前藩としては、その前年の文久三年「八月一八日の政変」後に成立した雄藩の参預会議が、幕府と薩摩藩との対立から解体しまっており、ぜひともう一度その間の話し合いをさせ、内外の重要課題を、雄藩会議で一挙に処理したいと考えたのである。しかし幕府政治の保守反動化が目立ち、かって文久期幕政改革で春嶽が折角大幅に緩和した参勤交代制を、元治元年九月一日には、元の厳しいやり方に復帰したほどであった。

この海舟・西郷の初対面で、海舟は幕府政治や幕吏のやり方を痛烈に批判した。そして幕府にはすでに天下の政治をとるような能力をなくしているので、雄藩の力で国政の難題を解決しなければならないと訴えた。これに対して西郷は大いに共鳴するところがあったという。② そのさい西郷は、第一次長州征伐で長州を徹底的に制裁しようとした強硬な考え方まで改めることになる。つまり長州の力を温存し、これを雄藩会議のなかに組み込むことを念頭に描くわけである。将来幕府を倒さなければならないとすれば、長州藩はむしろわが陣営に引き込む必要があるというのである。このように西郷は海舟を通じて、かねがね雄藩会議を真剣に構想している越前藩論を理解したことにもなる。

いずれにせよ、海舟と西郷とがお互いに腹を割って話し合える間柄になっていたこ

とが、江戸城攻撃停止のための会談で、双方が精一杯妥当とする方策を見出すことのできた大きな原因だといえよう。こうして江戸城攻撃にともなう双方の大きな犠牲と、戦乱による江戸市民の災難、外国勢力の不法な介入などの数々の非常事態③を避けることができたのである。

この海舟・西郷の緊急会談で、越前藩が間接的ではあるが、極めて重要な役割を果したことは、大いに注目したいところである。

註

① 海舟は、慶応四年正月、二月の両度にわたり、越前藩を介して京師参与に意見書を提出している。正月一八日の分は、外圧の恐るべき事態を重視し、「遠くは印度の破れ、近くは支那の地、長毛（注・長髪賊）、官兵、是非曲直を鳴らして、同属相喰み、西洋諸国その虚に乗ず。今哉、皇国殆ど同轍に陥らんとす。（後略）」（「海舟日記」）と訴えている。また二月一七日にも「印度・支那の轍、遠からず。朝廷を汚辱し、皇国を内破す、その責、何人に在る哉（以下略）」（「同」）と政府軍の強引な仕打ちに対する真剣な反省を求めたが、このような意見書を越前藩に託したことこそ、同藩が海舟と同じ危機意識に徹していたのを如実に物語るものである。

② 元治元年九月一一日の海舟・隆盛の初会合で、西郷が大久保利通あてに海舟の人物を報告したが、そのなかで、「勝氏に初めて面会仕り候ところ、実に驚き入り候ふ人物にて、最初うち明け話にて、差し越し候ところ、トンと頭を下げ申し候。どれだけ知略これあるやら知れぬ塩梅に見受け申し候」と述べており、如何に海舟の意見に共鳴したかがわかる。

③ 奈良本辰也氏は、その著「無血開城の立役者・幕末の三舟」（『勝海舟と西郷隆盛』・文芸春秋・昭和49・1月号所収）のなかで、「一歩誤れば、それらの国（イギリス・フランス）の軍事的な介入を呼起さないとは限らないのである。内乱は、それを誘う大きな原因である」（八七頁）と、内乱が対外的危機を誘う要因であることを強調するが、たしかに江戸城無血開城の歴史的意義は、極めて大きいものといわなければならない。

七、おわりに

幕末の緊迫した政治社会情勢のなかで、越前藩は「公議」による統一国家の政治路線を真剣に画策したが、このさい勝海舟こそ、とかく伝統的な幕閣専制を固執する幕府側にあって、極めて開明的な要人であり、しかも越前藩論をよく理解し共鳴した点で、大いに着目したい。また海舟自身が、越前藩論との交渉を通じて、現実の幕府政治を厳しく批判し、内外の重要課題を「私政」によらない「公議輿論」の下で処理することこそ、国論統一の上で妥当であるとの基本的な考え方を堅持したのである。

その点、前述の春嶽＝小楠政権の政治路線、越前藩の挙藩上洛計画、露艦対馬占領事件、第二次長州征伐などにおいて、いみじくも越前藩論と海舟の論策とが一致している。しかもこれらの諸問題をめぐり、両者とも日本の内外情勢に対する真剣な危機意識に徹したのである。

その最もピーク化した政府軍の江戸城総攻撃に当たり、西郷隆盛と勝海舟の劇的会

談が、当時の深刻な危機的情勢をよく収拾したわけであるが、このさい両者の人間関係を最初にとりもったのが越前藩であることを想起するときに、幕末史を通じて同藩が懸命に画策した歴史的意義は改めて見直す必要があろう。

要するに明治新政権による近代的統一国家の成立に対して、越前藩と海舟の統一国家論がいかに重要な役割を果したかは、高く評価しなければならない。

〔付記〕

本稿は、『歴史読本』（新人物往来社刊・勝海舟特集、昭和四九年二月号）所載の小論「危機感に徹した越前藩と海舟」の内容を敷えんしたものである。